猿蓑集巻之五

去来

鳶の羽も刷ぬよしの春

芭蕉

一ぬけ二ぬけあの屋敷かな

凡兆

股引の朝うかいけんて

史邦

たぬきをとすす篠張の弓

蕉

まいてゝ戸々宮造り雪の月

来

人もとれすす名物乃梨

かさなる墨流やしく雛屋哉　邦
ましらうつるやの長袋　兆
行年を言の門ぶまつるなり　来
里人の初くや年の貝あはく　蕉
ほつまする去年の孫こそ袖なく　兆
芝蘭はしのとちる　邦
吸物に生まれすぎる涼　蕉
三里あまり此道うんける　来

この秀を盧同う男居ありて　邦
きまつる月の秋夜　兆
若ゑ花の芋水鉢　蕉
ひらり歩と鉢の鼠ち　来
いちとせに二日乃地喰て歯　兆
雪をけふさしる鳴北風　邦
出とをに蓬れ登る雪雪　来
ほうまの皆鳴仕舞より　蕉

疲骨のまゝ起るる力なき
陸をとりて車引こむ　邦
うき人を枳殻垣ちらんん　兆
いまや別の力まゝ出す　蕉
せつゝげふ猶てらをうたち　来
ゆゝしい切るる花ゝしるよ　兆
青天よ有明月の紅ちけ　邦
湖水の秋乃法良ゝ花　来
　　蕉

紫の戸や蕎麦ゆすまれ歌をよむ　邦
ぬのこ若習ふ毎月紅ゝ道　兆
押合て寝ゝ八又ちつゝ　蕉
ゝゝ代乃まゝ赤ゝ　来
一撫鞦つゝる窓のゝれ　兆
枇杷の石ゝ　邦

芭蕉　九
凡兆　九
史邦　九

市中は物のほしやる夜の月　凡兆

あけしめ〳〵と門の音　芭蕉

二番草取るや畑の隅よりに　去来

庚申まつりあり一枚　兆

切籠は銀もて人をすまるるよ　蕉

たゞとまりしに長き根菅　来

草村の蛙こハうるさき迄
藤乃芽そろ〳〵に枝ゆ[illegible]
道心のおこりハ[illegible]あれつるむ時　来
紙ぬれ七尾の冬ハ住うき　兆
魚の骨ちらかる迄の老ぬて　蕉
待人入て小庵の鐘　来
立うり屋風を倒す女哉　兆
湯屋ハ竹の簀子俺しる　蕉

茴香ぬ[illegible]を喰[illegible]する風
俤やさもく〳〵さすらえる　兆
さる引の猿と共を猫の子　蕉
年に一年の地子[illegible]　来
名五六寸生まつける[illegible]清　兆
見袋ゆ[illegible]黒[illegible]の石　蕉
追て早よ[illegible]る刀持　栗
[illegible]ちの[illegible]ゆ水こ[illegible]ゆ　兆

戸障子もむかしの黄昏　蕉
てんぢくまでもわいつてくる　来
とうとう草鞋を作る自慢さ　兆
蚤を捕ひよ起しこの秋　蕉
そのまたたうひ落る秋落　来
ゆうみて蓋のあつあつ粥　兆
草庵よ新酒ぐるぐるまわす　蕉
いのち嬉しき撰集出る　来

ウ

きまるまでよ品うつる窓もとで　兆
法華の果て皆小町なら　蕉
あたたかう粥すすりつゝ　来
法ゐ会ととなつまで居る　兆
夏ひとつに風遠ハするあつけ　蕉
かすとうとあ屋の豚もうさ　来

芭蕉　十二
去来　十二

庶汁椀の京ゆかしうもてなす　北

あぶらかすりて寒寝する秋　芭蕉

彰月愛多し月のけよ　野水

ものへて蛾十乃とうまる　去来

手代殊へま物を振子同て　蕉

号ゆきにたたしう雪降る　北

ウ
奈出して拙き餘る春の夢
廣郎うる和よ
中ふりにうまれ吟へハ風薫
蛙のこゑをうまて宇味よ
うのみすひ出ふ
逆せうき屋ふ
金鍔と人よ
あり風呂すき
町の秋を又ハ
ゆをとるもの
茶をもちる方ハ
まを見ハ
名
うへるや山陰
柴ふ家のむ
ゑこ乃あ
旅の秋を

乗
水
蕉
兆
乗
水
蕉
兆
乗
水
蕉
兆
乗
水
蕉

すきぬきを女性賢愚もさまざま　　来

何のまもしの寝乃おもく　　水

夕月夜星の光も供廣寺　　蕉

人もわすれぬあるまの水　　兆

うそつきに自慢いとも無益　　水

又またたる地獄を出る　　来

堤ちり回の音やきていまま　　兆

加茂乃やうハ独を社のり　　蕉

地うち民家を高くして　　来

雨のやうに民家を迅速　　水

屋弥ゝる書賢の乗物あるまま　　蕉

まつまる水の蘭のつらん　　兆

糸撥股いけいたる時ならん　　来

寒ゝ三月曙乃うゝ　　水

芭蕉　九
野水　九
去来　九

餞乙刃東武行　芭蕉

梅の葉まじりの月の見つけ汁
かさあつしを雪の曙　乙刃
雲霧の小田より五指ちぎれ　珠碩
ちらちら雨のふるはよし　素男
片隅より虫歯うえて雁の月　刃
二階の客をまねくあき　蕉

放やうつゝに踏みたるも男
稲の葉廻乃力なきゝを碩
ちらしんに初さける蕉扇
問義頭と吟ずハる孟
卯の刻乃箕に毎日の方碩
すゝまる杖のまゝにうちうち男
萩の机すゝめの机よりて孟
行ゝとゝる百舌の一聲智月

懷よりあるもる煙の月　凡兆
汐さゝまゝぬ海のあつら孟
鶴の柄よりたまわるゝ去来
庚すゝちゝすかりの跡兆
名
去れ目よ仕舞て入る猪机正秀
庵屋ゆよ結のまうり来
汗ぬぐひ湯のまゝの糸半殘
ゝれ世ゝまゝ雛乃下土芳

大腰よりひきまはしてて　殘
身はめれ紙の取所なきを　芳
小刀乃鯰又なる細工ちと　殘
棚よりすとりす大年の夜　園風
ちちとはるもの伏戸の濱　猿雖
もしおみ合せてるかきぬ　殘
此方もうれめてる破扇　風
碧池新もせてきて自足る　雖

ウ
嗅煙草の陳ハちと緣つゝ　芳
係へハうしほとゝんな顔　風
形なを弱をおひしる金盃　嵐蘭
うすをかゝる矢の劍下駄　史邦
ゆよゝこゝはまを三ヶ　野水
雛の被をとゝ深るたゝ色　羽紅

芭蕉　三

乙刃　五
珎碩　三
素男　三
智月　一
凡兆　二
去来　二
正秀　一
半残　四
土芳　三
園風　三
猿雖　二
嵐蘭　一
史邦　一
野水　一
羽紅　一

猿蓑集巻之六

幻住菴記

芭蕉翁

石山の奥に向のうしろ山を国分山といふ国分寺の名を偸みなるべし麓より頂を流れ落る翠巖よ叢々幾重三曲二百余町八幡宮あり世に伝ふる神体八弥陀の像とや唯一の家に六

甚忌嫌する事を兩部光秋和尚
利益の塵を同じうしたまふ
又貴し日比をくんの諸ちれハ
いと神さび物ふるう傷ム位
捨し草の戸をとよりき根笠新
をとをとを風ムをら墨染て孤狸
物ことをはるもり行位菴と云あ
の僧ハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父ムん侍りしを今八年ハ
しよりよ物ムを幻住老人の名を
のこ孫ちらを又市中ハさを
十年計ハて五十年ハ
ムて養生の名を失ひ端年
家ハ離て奥羽象潟の景を目
て面をとをを言するこあゆ
をを北海の荒磯よをひ

[illegible]て七歳湖水の波よ深碧の
浮菓の流るゝまゝに[illegible]一本
乃陰[illegible]軒端[illegible]
[illegible]て和月
初いとうめた入[illegible]山やて出
しとさへ[illegible]春
の[illegible]つ咲[illegible]り
山霞[illegible]

[illegible]宿[illegible]波[illegible]
[illegible]て魂呉楚集
南[illegible]風
山[illegible]東中[illegible]身ハ漂泊湖[illegible]立
[illegible]
[illegible]南薫[illegible]
北風波を浸して深[illegible]日枝の山[illegible]
[illegible]湾の松[illegible]
[illegible]

未樵の名り舞の小男早苗とる
音貴花ふ夕の雲花を水鶏ほ
和音義景地ふ[illegible]と云事
[illegible]中の三上山八十峯如伊よ
[illegible]て武義抜て古を拭もなし
いてゝも田上山の古人をうゑ[illegible]
う山嶽千丈の峯袴腰といふ山の黒
津の国いとゝ届りて洞代国

よゝとゝみうゝん義集の深あり
うう行脚屋ふ[illegible]と行乃
宗ふ遠のほう松の樹作業の国産
を数〻猿の腰掛と名付被海業
ふ巣といふ主清宗ふ養を
[illegible]る王翁除俗の徒ふ[illegible]唯聽
辟山民と如て屠顔ふ色をつけ
如空山ふ風を折て座ふ

くしこゝろ[illegible]る時[illegible]谷の清水を
汲て自ら炊て[illegible]の[illegible]
一炉の傍へいとゝ[illegible]る昔行[illegible]人の
[illegible]んとて行[illegible]て角くみを
る地[illegible]れ拓佛一間を隔て夜
の地[illegible]むへる[illegible]
へ[illegible]を[illegible]流[illegible]る[illegible]の傍[illegible]
か[illegible]の甲斐行[illegible]の嚴[illegible]てはし

洛[illegible]
して額をとゝ[illegible]と[illegible]
深く幻住庵のこと富[illegible]
草庵の記念とのぬすへて山居を
いとし旅寢と云[illegible]器[illegible]
[illegible]木[illegible]拾[illegible]越の[illegible]
[illegible]の上[illegible]
[illegible]人を動[illegible]

里の行のことを入て書ていの者乃稲
くらいあり〳〵鬼の豆細くふるかと
家内さつぬ農談日既よ山の端よ
うまでを夜屋鶏よ月を待ていハ
新を仕し始を取て園雨よ豆雅
をとこすくいへかとてひるめるよ
深家をあ山野よ跡をかくさ舞
とーしあるやく病人よ伝て世

をいとしく人よ伝ち情年月ハ
勝〳〵拙を自ハ稲を知よ
あるを仕官無命ハ地をそ
やと一しい佛籠祖室の扉よ入
ら舞をもあもちなよ凡を
よ月を世あ花鳥ハ情を労して
暫く生涯のもわ事とさへなれを
ハよ月ハ雲月よりて才一節よる

る樂天八五臈〻神をやつり老杖
痩る賢愚文質のしらくもの
さらもいつまてか幻の病をやとせ
ゆきもし拾ふ〻ぬ

題芭蕉翁國分山
幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉遂作鄙章
一篇歌之曰
琵湖南兮國分嶺

古巷鬱芎緑陰清
茅屋竹緑絶數間
内有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古冨勝覧
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日　震軒具州

几右日記

曲水
野水
去来
凡兆
平那
珠碩

時雨背車ふんでやる麓哉
ふみ跡もやるのこ
鶏もなくなく
海苔五月雨ぬれ一ぞ
軒ちかき石梨ちれ桂の
雨脛やもるやうの
贈紙帳

地をよる波はなとうち　野徑
いけるまて露の玉ちる　里東
蛍見るやとのこけの苔　乙刃
顔や蓮乃中ゝ花ちる　膳所　怒誰
白ゝしく寄る波ゝ雪　探志
五羽六羽菴ちらすうんと雪　元志
末つゝたれる水鶏哉　膳所　泥土
笠あふいで柏ゝ風の色　史邦

月待や汐を扇風ゝ涼　正秀
ちつゝさい雲の扇流し清水　云人　柳陰
涼しさやうつに来うし雅ゝ　如行

訪ゝ留うゝ

椎の木をくゝ蟬の蟬の　膳所　朴水
風ゝ下や清流ゝ　義濃瑞井　市隠

之ゝ云ゝ

猪所来や早苗のゝ涼　半殘

麦乃粉を太産す

一袋これや鳥羽田のこと麦　之道

書音

一麦入る山さハらや長崎　魯町

夕立や稲穂の奥へまつすぐ　及肩

羅紗掛物掛

稲ひや田よりあたるすすき　高白

贈簑

まつすぐのまつすみのひろ　北枝

末屋あるゝ侍ふみすきの蓼　末節

包紙よ書

繻子袋や萩の露　膳所扇

稲のふさ佛花太産　智月

石山やひろて果て妹の用　羽紅

猶の輪やこれて明るむまつ　昌房

里ハつまりとるあつを　何処

啼やいづくぞ　越人

越人と同じく訪合て

笠の実共借よ庵入れ　等哉

明年弥生尋問庵

寒ゐやあるじ思ひ戸ぬりつる　嵐蘭

同夜

涼さやけ居をとゝ位哉　曽良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首謀也

非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑

只任心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊学棋館

竹窓躍等凌節斯有歳屬撰此

集玩弄無已自謂絶超狐腋白

裘者也於是四方嗤笑憧々往

来或千里寄書中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集録者索居竄栖為難
通信且有旋倪婦人不琢磨者
兼言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉杲分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維時元禄四稔辛未仲春余掛
錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾下蓑高張有補于詞
海澳人云

風狂野衲
文艸漢書
正竹書之

京寺町二条上ル
井筒屋庄兵衛板